

た。内容や講義など医療系にとっても偏っていて、非医療系学生が難しそうな場面があった。また病院見学や講義の際は学生 5 人とも医療系学生と認識されている部分があった。[千葉大生]

- せっかく色々な学生と共に渡航できたので、イギリスにて他分野の先生とお話できる機会があると良いと思いました。イギリスの先生方は皆さん医療系の学生向けに話されている感じがしました。また日本でホームレスについての講義やオフラインでの顔合わせが少しあってもいいなと思いました。[千葉大生]
- wish we had more time as it was an amazing experience that went so quickly! (もっと時間があれば良かった。プログラムは本当に素晴らしい経験で、時間があっという間に過ぎてしまった。) [留学生]

昨年度に引き続き、プロセス評価としては今年度の数値目標を全て達成し、メタバースの利用やフィールドにおける学習プログラムも概ね計画通り達成できたと言える。複数の国からの学生が参加することにより、多種多様な立場から意見交換ができた点を評価した意見が見られた。その一方で、改善を検討すべき点としてイギリスでの現地交流など学生との交流が比較的少なくなってしまうグループでは、より交流できる機会を望む声があがった。また、多職種連携教育プログラムとして非医療系学部からの参加を募っているにも関わらず、医療系学生と非医療系学生を分けられてしまっているという学生の意見も見られた。この点は、このプログラムを運営していく中で、フィールドサイトの受け入れ先に改めて、医療現場であっても非医療職以外の視点も考慮に入れた多職種連携教育であることを、フィールドサイトと準備段階で念入りにすり合わせていく必要があると考える。引き続き、次年度以降も数値的な目標達成とより円滑で学習効果の高いプログラム運営のために検討・検証・改善を続けていく。

### 3-3. 学習成果の評価

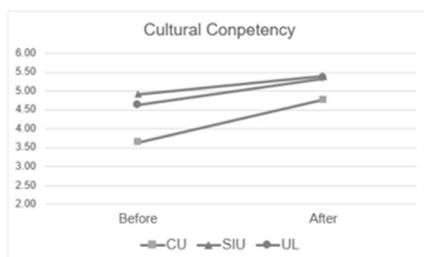
昨年度より連携実践能力および問題解決能力に追加して新たに本年度より Cultural Competency に関する項目を追加している。千葉大生 11 名、レスター大学生 3 名とシンビオシス国際大学生 4 名の計 18 名（男性 4 名、女性 14 名）から、BEVI には千葉大生 7 名とシンビオシス国際大学生 7 名の計 14 名（男性 3 名、女性 11 名）から事前事後 2 時点揃った回答を得た。

#### 3-3-1. 連携実践能力

連携実践能力は、King et al. (2016)による Interprofessional Socialization and Valuing Scale (ISVS-21)<sup>\*1</sup>を用いて測定した (例: I have gained an enhanced awareness of roles of other professionals on a team.)。21 項目 1 次元から成り、0 (全くあてはまらない) から 6 (非常

によくあてはまる)の7件法で測定する尺度である<sup>※2</sup>。本尺度の日本語版は未発表であることと、プログラムの特性上千葉大学の学生は一定の英語能力により選抜されていることから、日印の学生共に英語で項目を表示し回答を求めた。

### 事前事後測定の結果



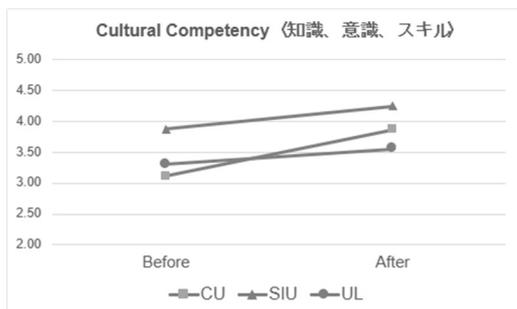
本尺度の取りうる値は0～7である。全体平均は事前4.39 (SD = .55)、事後5.16 (SD = .28)であり、プログラム全体として事前より事後の方が自己評価が見られた。大学毎に値を見ると、千葉大生においては事前3.64 (SD = .81)、事後4.77 (SD = .61)、シンビオシス国際大学生では事前4.92 (SD = .49)、事後5.39 (SD = .41)、

レスター大生では事前4.62 (SD = .88)、事後5.33 (SD = .44)となった。全ての大学において、数値の上昇が確認された。プログラム開始前には千葉大生が他2大学生より低い値となっていたが、千葉大生の自己評価の上昇により、プログラム後にはこの差は縮まった。

### 3-3-2. Cultural Competency 文化的能力 (知識・意識・スキル)

Cultural Competencyとは文化的能力と訳されており、ここでは自分とは異なる民族や集団の文化を理解し、効果的に交流したり文化を考慮した医療やケアを提供したりする能力と捉える。Domenech et al. (2022)による Development of the awareness, skills, knowledge: General (ASK-G) scale を用いて測定した。これは信頼性と妥当性が確保された比較的新しい尺度であり、2022年度のトライアルプログラムの研究結果から GRIP が発達を図る Cultural competency の3側面 (知識・意識・スキル) をより明瞭に測定することが必要と考えられたために追加された。いずれも著作権侵害の恐れがない。また、英語力による選別を突破した学生が参加することと全ての学習活動を英語で実施するという GRIP プログラムの特性上、尺度への回答も基本的には英語で実施予定であるが、妥当性と信頼性が確認された日本語版が開発されていることから、回答者の負担軽減のため日本語による回答も選択可能とした。

### 事前事後測定の結果



Cultural Competency(知識、意識、スキル)の取りうる値の範囲は0~5である。その尺度は確かな信頼性を持つ4つの要因から測定される。それは「自己への気づき」、「他者への気づき」、「主体的な能力開発」、「知識」等の4項目で測定される。全体平均は事前3.43 (SD = .33)、事後3.87 (SD = .28)となった。そのうち千葉大生に

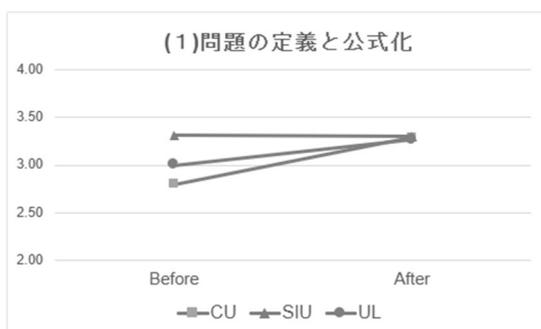
おいては事前3.12 (SD = 1.21)、事後3.87 (SD = .94)と上昇しており、シンビオシス国際大生においては事前3.88 (SD = .81)、事後4.25(SD=.62)、レスター大学では事前3.31 (SD = 1.16)、事後3.56(SD=1.16)となった。全ての学校で上昇がみられたが、特に千葉大生の変化が比較的大きくなった。

### 3-3-3. 問題解決能力

問題解決能力は、昨年に引き続き D' Zurilla et al. (1998)による.Social Problem-Solving Inventory-Revised (SPSI-R)、並びにその日本語版である佐藤ほか.(2006)を用いて測定した。20項目4次元から成り、0(全くあてはまらない)から4(大変よくあてはまる)の4件法で測定する尺度である。(1)問題の定義と公式化、(2)さまざまな解決法の案出、(3)意志決定、(4)解決法の実行と検証の各次元は5項目ずつの平均値で算出した。本年度より、GRIPを通しての発達および変化が期待される側面として、合理的問題解決に加えて、ポジティブな問題志向、ネガティブな問題志向の2側面を加えて測定することとした。

#### 事前事後測定の結果

##### (1)問題の定義と公式化

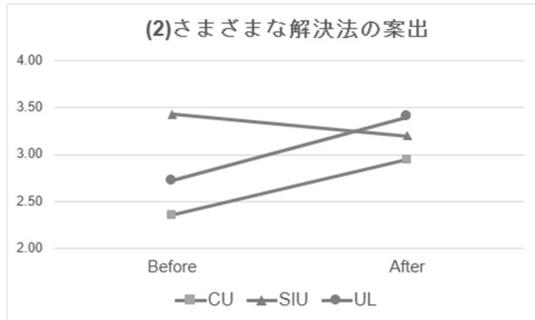


SPSI-Rの取りうる値の範囲は0~4である。1つめのサブスケールである「問題の定義と公式化」は、「解決すべき問題を抱えている時は、状況を分析し、どのような障害物が自分の望みの達成を妨げているのかを明らかにしようとする」や「問題を解決しようとする前に、自分の達成したい具体的な目標を設定する」等の

5項目で測定される。

全体平均は事前3.04 (SD = .21)、事後3.29 (SD = .01)。そのうち千葉大生においては事前2.80 (SD = .14)、事後3.29 (SD = .25)、シンビオシス国際大生においては事前3.00 (SD = .31)、事後3.27 (SD = .10)、レスター大学では事前3.31 (SD = .33)、事後3.56(SD=.25)となった。

## (2)さまざまな解決法の案出

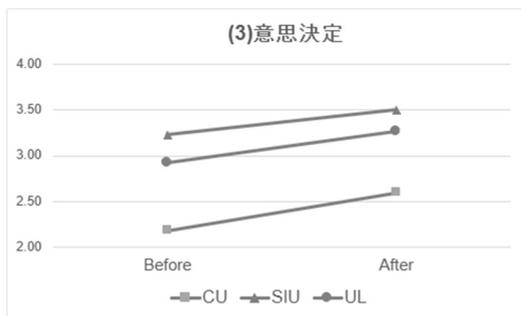


SPSI-R の 2 つめのサブスケールである「さまざまな解決法の案出」は、「問題を解決しようとしている時は、しばしば異なった解決策を考え、それらのいくつかを組み合わせる良い解決策を生み出そうとする」や「問題を解決しようとする時は、できるだけ多くの違った角度から問題に取り組む」等の 5 項目で測定される。

る。

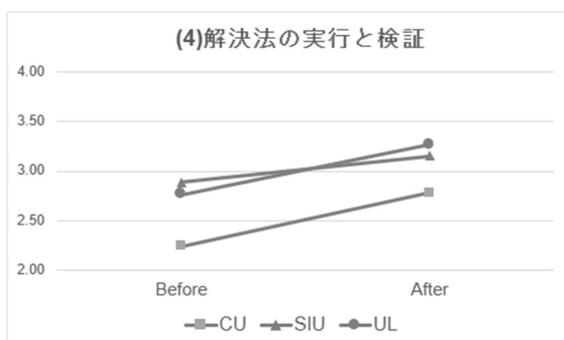
全体平均は事前 2.84 (SD = .44)、事後 3.18 (SD = .19) であり、全体として上昇がみられた。そのうち千葉大生は事前 2.36 (SD = .49)、事後 2.95 (SD = .34)。シンビオシス国際大生は事前 3.43 (SD = .16)、事後 3.20 (SD = .10)、レスター大生では事前 2.72 (SD = .60)、事後 3.40 (SD = .25) となった。千葉大生、レスター大生ではプログラム参加前後で上昇が見られ、シンビオシス国際大生には変化が見られなかった。

## (3)意思決定



SPSI-R の 3 つめのサブスケールである「意思決定」は、「決断する時は、それぞれの選択肢の直後の結果と、長い目で見た結果の、両方を考慮する」や「決断する時は、選択肢を判断し、比較するために体系化された方法を用いる」等の 5 項目で測定される。このサブスケールの全体平均は事前 2.78 (SD = .44)、事後 3.12 (SD = .38) であり全体としては上昇がみられた。千葉大生においては事前 2.19 (SD = .34)、事後 2.64 (SD = .23) と上昇したものの、シンビオシス国際大生においては事前 3.23 (SD = .48)、事後 3.50 (SD = .16) レスター大生では事前 2.92 (SD = .27)、事後 3.27 (SD = .25) となった。

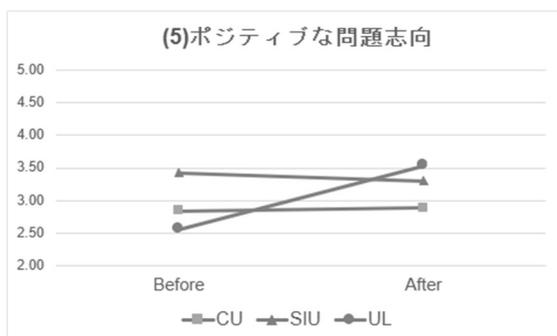
#### (4)解決法の実行と検証



SPSI-Rの4つめのサブスケールである「解決法の実行と検証」は、「解決策を実行した後で、何が良くて何が悪かったのか分析する」や「問題に対する解決策を実行した後で、状況がどのくらい良くなっているかを、できるだけ注意深く評価しようとする」等の5項目で測定される。

全体平均は事前 2.63 (SD = .28)、事後 3.07 (SD = .21)。そのうち千葉大生は事前 2.24 (SD = .21)、事後 2.78 (SD = .11)、シンビオシス国際大生は事前 2.89 (SD = .42)、事後 3.15 (SD = .20)、レスター大生では事前 2.76 (SD = .41)、事後 3.27 (SD = .33)となった。であった。どのグループも上昇が見られ、特に千葉大生、レスター大生では 0.5 以上の上昇が確認された。

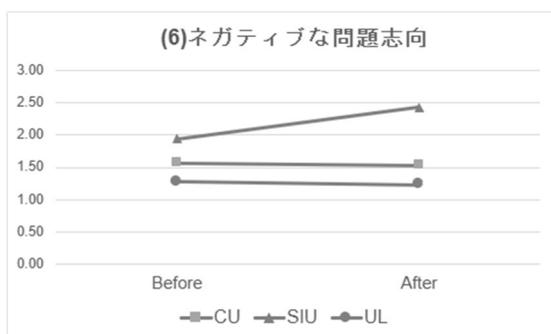
#### (5)ポジティブな問題思考



SPSI-Rの5つめのサブスケールである「ポジティブな問題思考」は「問題を解決可能であると判断する」や「自分には問題を解決する能力があると考える」などといった、問題に対する建設的・積極的な構えを測定する下位尺度であり、5項目からなる。全体平均は事前 2.94 (SD = .21)、事後 3.24 (SD = .01)。

そのうち千葉大生は事前 2.84 (SD = .12)、事後 2.89 (SD = .27)、シンビオシス国際大生は事前 3.43 (SD = .13)、事後 3.30 (SD = .23)、レスター大生では事前 2.56 (SD = .53)、事後 3.53 (SD = .70)となった。全体平均ではわずかに上昇となったが、その内訳は千葉大生とシンビオシス国際大生は大きく変わらず、レスター大生の上昇が全体をけん引する形となった。

## (6)ネガティブな問題思考



6 つめのサブスケールである「ネガティブな問題思考」では、「問題を脅威的であるととらえる」や「自分には問題をうまく解決することができないと考える」などといった、問題に対する否定的・消極的な構えを測定している。10 項目から構成されている。全体平均は事前 1.60(SD = .27)、事後 1.73(SD = .51)。

そのうち千葉大生は事前 1.57 (SD = .32)、事後 1.54 (SD = .27)、シンビオシス国際大生は事前 1.94 (SD = .31)、事後 2.43 (SD = .23)、レスター大生では事前 1.28 (SD = .58)、事後 1.23(SD=.70)となった。千葉大生とレスター大生では大きく変化は見られなかったが、シンビオシス国際大生では大きく上昇する形となった。

### 3-3-4 . BEVI を使用した Cultural Competency を含む信念および世界観

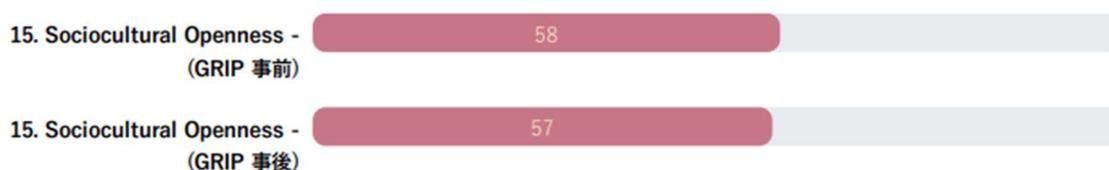
昨年度に引き続き BEVI (Wandschneider et al., 2015) を使用して Cultural Competency を含む信念および世界観に関する分析を行った。BEVI は、留学プログラムの成果を定量的および客観的な測定・検証を目的として開発されたツールである。日本を含む 140 カ国・8 万件のデータを基に、異文化受容性をはじめとする個人の様々な信念・価値 (Belief and Value) を 185 の項目から統計的に算出する。留学プログラムの評価には、社会的オープン性 (Sociocultural Openness) 並びに世界との共鳴 (Global Resonance) が頻用される。それぞれの測定項目は非公開である。取りうる値は 0 から 100 であり、世界平均を 50 として相対的に数値を解釈する必要がある。一般的には各グループのプログラム前と後に採取したデータを比較し、それをもとに分析を行うが、2023 年度では事前と事後両方に回答した参加者がごく少数であったため、千葉大生以外の国籍別のレポートを BEVI 分析にて抽出することができなかった。参加者のうち千葉大生は事前の回答が一定数得ることができたため、グループの特性として分析を行っていく。ここでは当プログラムに特に関連性のある社会的文化的オープン性と世界との共鳴についてプログラム前後の変化や世界平均と比較していく。

#### 事前事後測定の結果

##### (1) 社会文化的オープン性 (Sociocultural Openness)

社会文化的オープン性とは、文化、経済、教育 環境、ジェンダー、国際関係、政治の分野におけるさまざまな行動、政策及び実践について進歩的でオープンである程度を表すものである。測定項目は非公開であるが、「私たちは、自分たちと異なる文化を理解しようとするべきだ」等の項目が含まれるとされている。

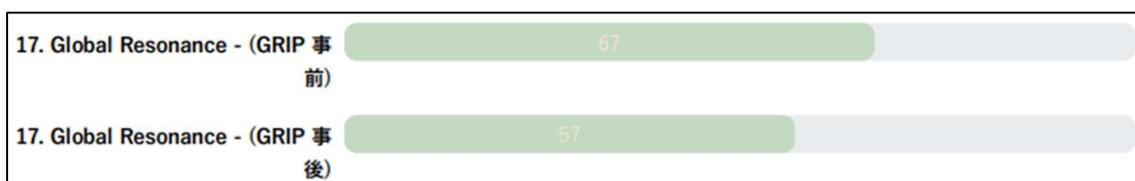
以下のグラフは、千葉大生の BEVI 結果のプログラム前後比較を表している。BEVI の値は統計的に有意な変化であるかどうかの検定を行うことができないが、開発者によると 5 以上の増減が見られた場合に明確な変化があったと見なすのが一般的である。千葉大生平均は事前 58、事後 57 でほぼ変化がなかった。世界の平均が 50 となっているため、世界平均と比較するとわずかに高い数値となる。つまり、参加した千葉大生は他国の社会文化に対しては、ほぼ世界の平均と同じか、やや進歩的でオープンとなることがうかがえる。



## 2) 世界との共鳴 (Global Resonance)

世界との共鳴とは、さまざまな個人、集団、言語、文化について学ぶことや出会うことを努力している程度や、グローバル社会への関与を望んでいる程度を表すものである。「世界の出来事について多くの知識を持っていることは大切だ」等の項目から測定される。

千葉大生の平均は事前 67、事後 57 であった。プログラム前には 67 という世界平均に比べて高い数値でプログラムに臨んでいるが、プログラム後には 67 から 10 減少していることがわかる。ここから考えられるもこととして、異なる文化を学ぶことへの努力や関与が低下したということは、努力が足りてないと感じた場合や、関与関心が低下したという可能性が考えられる。



以上より、学習成果の評価としては、連携実践能力と問題解決能力が統計的に上昇した点は、当プログラムの狙いとなる活動が行えていると評価できる。全体的に数値が上昇している中で、「ネガティブな問題思考」におけるシンビオシス国際大学の点数が他大学と比べて上昇しているという点である。つまり、プログラムを始める前と後では、社会的な課題に取り組むにあたり、ネガティブな問題思考が強くなる傾向にあったと言える。この点をさらに個人的な回答レベルまで掘り下げてみると、回答が得られたシンビオシス国際大学生 4 人のうち、3 人の点数が上昇していることが分かった。また、BEVI での千葉大生の分析結果

でも世界との共鳴という項目では、プログラム前後で減少するという近しい事象が観察されている。これらの結果から推測できることとして、参加者自身が思い描いていた社会課題や多文化への適応能力を実際に体験したことで、想像と現実のギャップがこの結果として現れた可能性がある。この変化が何に起因しているかは、非常に興味深いところであり、今後のプログラムを運営における文化的な側面や考え方や感じ方の違いを分析する上での大きな足掛かりとなるだろう。プログラムを通して、学生たちの考え方にどのような変化をもたらしたかをタイムリーなインタビュー調査などで掘り下げることができれば、より精度の高いプログラムの改善に繋がる。

今回の調査では回答者がシンビオシス国際大学生は 4 人と少なく、一般化できるほどの結果が得られていないのは考慮しておく必要がある。事前と事後の両方を回答した学生は千葉大生は 73.3%、シンビオシス国際大学生は 40%、レスター大生が 60%となる。母数が少ないことによる一般化が難しくなる点を避けるため、回答率を上昇させるという課題は引き続き検討していく必要がある。特に調査のための質問数が合計で約 70 問と多くなることは、学生にとって負担となってしまうことも予想できることから、プログラム内でも回答する時間を十分に設けることや、質問項目について不明点などがすぐ聞けるように大学スタッフが近くにいる状態で質問調査を実施するなどといった工夫を検討していく必要がある。

## 3-4 外部評価

### 3-4-1. GRIP 外部評価委員会の概要

外部有識者から評価を受けプログラムの質の向上を図るため、GRIP 推進委員会の規定を整備し GRIP 外部評価委員会を置くことを定めている。GRIP 外部評価委員会は、日本、並びにアメリカ等の国外の有識者を委員とし、年に 1 回開催する。2023 年度はカタールと南アフリカより海外における IPE の有識者として新たに 2 人の外部評価委員を招待し、より多様性のある意見を取り入れることができた。一年間のプログラム運営のプロセスおよび学習成果を、本年次報告としてだけでなく活動実績や今後の計画を資料としてまとめ、客観的に本プログラムを評価していただき、次年度以降のプログラム改善の基盤とする。

2023 年度の外部評価委員会は、2023 年 6 月にオンライン会議にて日本、アメリカ、イギリス、カタール、南アフリカを繋ぎ実施された。それぞれ、異文化感受性、国際交流プログラムの評価、地域創生に精通した 6 名の外部評価委員より、プログラムの目的や問題解決に取り組む際の各国の社会システムの捉え方等についての活発な議論が交わされた。

### 3-4-2. 評価方法

GRIP 外部評価委員会による評価は、年間のプログラム運営プロセスと学習成果を包括的に検討することを目的としている。評価の具体的な方法は以下の通りである。